

平成 25 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注：学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること)

地域在住要介護者の意欲が外出に与える影響

学位の種類： 修士 (理学療法学)

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 理学療法科学域
学修番号 12895604

氏名：寺田 友明

(指導教員名：池田 誠 教授)

注：1 ページあたり 1,000 字程度 (欧文の場合 300 ワード程度) で、本様式 1~2 枚 (A4 版) 程度とする。

要旨

【背景と目的】外出は日常生活において重要な行動であり、生活の質 (Quality of life : QOL) に影響を与える要因の一つである。外出頻度の減少は、高齢者の活動水準の低下を引き起こし、寝たきりに関連する要因であると言われている。これらのことから外出は、QOL と活動という点で重要な行動である。「閉じこもり」に影響を与える要因として、身体的要因、環境的要因、心理的要因が挙げられている。日常の生活においては身体機能に重度の障害があるにも関わらず、また屋内外の環境に物理的障害が存在していても外出している者がいる。本研究の目的は、身体的要因と環境的要因の各項目と比較して、心理的要因である意欲が外出に影響を与えるかを明らかにすること、また意欲低下がある者となない者の特徴を明らかにすることとした。

【方法】対象は、訪問リハビリテーションを利用している地域在住要介護者 114 名であった。調査は、対象者の属性、身体状況、外出状況、外出に対する満足度 (QOL)、意欲 (やる気スコア)、対象者の外出支援に対する考えについて自己記入式の調査票を用いて実施した。対象者の調査協力の同意は、調査票の返信をもって同意とみなした。統計的分析は、対象者を外出頻度別に外出群と非外出群の二群に分類し二群間で各質問項目について比較検討を行った。その結果有意差が認められた項目を独立変数、外出の有無を従属変数として、外出に関連している要因を明らかにするために多重ロジスティック回帰分析を行った。また、対象者の中で意欲低下がある者となない者の特徴を明らかにするために、対象者をやる気スコアを基準に意欲低下あり群、意欲低下なし群として二群間で比較検討を行った。外出および意欲について分類した二群間の比較においては、t 検定、 χ^2 乗検定、を用いて検討を行った。全ての統計処理の有意水準は危険率 5% 未満とした

【結果】身体状況である自宅内移動、更衣、排泄、また外出状況の自宅近隣に目的地があるかについては有意な関連を示さなかったために外出の有無に対する独立変数として分析には加えなかった。多重ロジスティック回帰分析の結果、外出の有無に有意に影響を与える要因として、年齢 (オッズ比 [95% 信頼区間] : 0.92 [0.86-0.92])、通所利用 (2.58 [1.37-4.76]) 満足度 (1.64 [1.25-2.16])、やる気スコア (0.29 [0.08-0.96]) が有意な項目として抽出された。全対象者を意欲低下なし群と意欲低下あり群に分類して比較した結果、外出の有無 ($p=0.004$) が二群間で有意な関連を示した。

【考察】非外出群のうち 27 名が自宅内移動が自立していたことから、移動能力があるにも関わらず外出しない「閉じこもり」の存在が示唆された。外出しないことで活動量が減少し、ADL 低下の危険性がある者が確認された。通所利用の有無は、外出群と非外出群の比較および多重ロジスティック回帰分析の結果からも有意な関連が認められた。通所系サービスの役割の一つである「閉じこもり」「閉じ込められ」の者に対して外出を促すというこ

とが示されたと考える。また、本研究においては、満足度において、1週間に1回以上外出している群の意欲が有意に高い結果が得られ、多重ロジスティック回帰分析の結果からも満足度は外出の有無に有意に関連していることが認められた。満足度はQOLを評価するための一つの手段である。QOLを高めることができる外出をするためには、生活に必要な物や友人との交流を自発的に目標として持つことが重要であると考えられる。外出群と非外出群の比較においては身体状況に有意な差は認められなかった。外出における身体的要因と環境的要因で重要なことは、屋外での物的障害を回避することができる身体機能や人的・物的介助方法を有しているかであることが考えられる。

外出群と非外出群の比較において、やる気スコアの合計点の平均値に有意な差が認められ、多重ロジスティック回帰分析においてもやる気スコアが外出に対して有意に関連する項目として抽出された。また、対象者をやる気スコアが16点以上を意欲低下あり群、16点未満を意欲低下なし群に分類し比較検討したところ、意欲低下なし群が有意に週1回以上外出しておりかつ意欲低下あり群が週1回未満の外出頻度となっていた。本調査の結果からは、意欲低下がなく外出している者の中には、身体状況や環境状況に影響されることなく外出できると思うことや外出の価値を明確に持ち合わせ、外出するための適切な支援を受けていることが考えられる。

【結論】本研究の結果、意欲が外出に影響を与える要因として抽出された。このことから本研究の仮説である、外出に対して身体的要因、環境的要因、心理的要因の中では心理的要因である意欲が最も影響を与える要因であることが示唆された。しかし、外出には依然として心理的要因である意欲を含めて身体的要因、環境的要因に検討すべき項目が多数存在することが考えられる。

キーワード 外出 意欲 QOL